

三遊亭らん丈 後援会会報

『三度目は早稲田大学』 三遊亭らん丈

らん丈HPのほか、GREEやmixiでもお伝えしているとおり、二〇〇五年四月、早大に学士入学しました。ちなみに、GREEでもmixiでもお友達を募っており、ますので、是非、メールをください。

大学へは、落語家の活動と並行しての履修となるために、一九九八年に夜間学部から授業選択において柔軟性のある時間編成ができる『昼夜開講学部』へと移行した、社会科学部に学士入学したので、す。

ではいったい何を学ぶために、三度目の学生生活を、立教の文学部と経済学部、それに、早稲田で送ることにしたのか。それは、今年度履修登録をした科目

を、じかにここに掲示するのが最も手取り早いと思うので、以下にそれを記します。

社会科学総合分野から「環境社会論」、政治学分野から「比較議会論」「政治機構論」「行政学」「国際政治理論」「現代地方自治論」「現代政治制度論」「現代政治分析」、法学分野から「憲法」「法学原論」、商学分野から「マーケティング論」「産業心理学」「中小企業論」、ゼミナールⅠⅡはともに、「地方自治と行政」、以上あわせて履修上限の四十八単位となりますが、これらの学問を学びたかったから編入したのです。

ごらん頂いてお分かりの通り、経済学

分野は一科目も登録していません。それは、今年度は政治学、なかでも行政と地方自治に関する勉強に、集中するためです。

今年度の早大編入にあたって驚いたことは、さほどありません。というのも、立教の経済を卒業したのが二〇〇二年でしたので、それから僅か三年しか経っていないために、大学こそ違い、ハーバードやオックスフォードに編入したというのならばともかく、どちらも同じ私大なので、それから、それほど大きな違いはないからです。

といっても、まるで驚きがないかといえば、そんなことはありません。

瑣末なところでは、早大はかなり特異な大学といえるのではないのでしょうか。

他の大学との最も顕著な違いは、教室に時計が一切ないことです。ただ、この

2005年6月15日発行
三遊亭らん丈後援会
第25号 頒価100円 〒194-0013
【事務所】町田市原町田4-10-19-101
【URL】<http://www.ranjo.jp/>
【E-mail】machida@ranjo.jp
TEL 042-732-2004

理由は分かります。試験で教室を使う際に、時計があると、その時計の時刻が正確な場合、試験時間に齟齬が生じるからでしょう。

けれど、どうにも解せないのが、授業の開始と終了を知らせるチャイムあるいは、ベルが鳴らないことです。

そのために、時間の管理は自ら行わなければなりません。時計はなくとも、チャイムを鳴らさないことには、授業時間が画定されません。さすがに教授は時計を持ってはいますが、教員の時計はすべて正しい時刻を指し示しているとは、限らないからです。チャイムを設置していない大学は、早稲田ぐらいのものではないでしょうか。

社会科学部は、先述のように昼夜開講制をとっており、平日は午後一時から九時十分まで、各十分のインターバルをとって五コマの授業が組まれているのですが、それをすべてとった場合、夕食を何時に食べることを大学は想定しているのか、という問題があります。

つまり、立教は午後六時から三十分間の夕食時間を設定していますが、早大は最終授業が終わる九時十分以降に、学生

が夕食を摂ることを想定しているのか。

あるいは慶應のように、食事時間を設定しない代わりに、学生は授業中であろうと食事を摂っても構わないというのであれば、そうしますが、早稲田はそのところが曖昧なのです。

ぼくは貧乏人なので、愛妻弁当が欠かせませんが、これをいつ食べるかが、目下のところ大きな問題となっています。

ひとつの授業が終わって、次の授業も同じ教室なので、さて、弁当をおおうと蓋を開けると、これがキムチ弁当。こうなると、困るのですよ、匂いが教室に充満してしまっています。学生たちは射るような視線をこちらに向けてますしね。

もっと悲惨だったのは、弁当を開け、さて箸をと探したところ、箸箱のなか为空っぽだったとき。

空腹には勝てず、箸箱の蓋で弁当を使いましたが、このときも学生の視線が痛かったこと。

みな見て見ぬふりで、口にこそ出しませんが、「人間、あんなつたらお終いな」とか、「人間落ちるところまで落ちるとあなるのか。可哀相に」、あるいは「箸も買えない貧乏人がまだ日本にいた

のか」といった憐れみの視線を、強く痛く感じたものです。

ほかには、早稲田では気取った人に会わない、といったところででしょうか。立教には気取った人が多かった、というわけでは決してないのですが、早稲田では今のところ、皆無です。

そういえば、こんなことがありました。トイレで、個室に入ったところ、その個室の鍵が掛からないのです。これは、目的の行為が実にやり難くなる事態ですが、その行為をしないわけには行かず、また、他の個室がすべて使用中だったため、その個室を使用せざるを得ないために、苦労しつつも用を済ませました。

個室を出て、手を洗った後に、事務所に行き、その旨を申し出、改善を望んだところ、職員に真顔で、こう尋ねられました。「分かりました。早速資料課に伝えておきます。それで、そのトイレは男性用ですか。それとも、女性用ですか」あんなあ、どうしてぼくが女性用のトイレの個室の鍵の掛かり具合を知っているのよ。

それにしても、よく訊かれるのです。なんでまた、しかも三度も大学に通うの

かと。その度に、ぼくはある人の言葉を援用して、こう答えることにしています。

『磁力と重力の発見』で大佛次郎賞などを受賞した山本義隆さんは、「何のために勉強するのでしょうか」と問いかけて、こう答えているのだそうです。

「専門のことであろうが、専門外のことであるのが、要するにものごとを自分の頭で考え、自分の言葉で自分の意見を

『憲法を考える』

三遊亭らん丈

『アエラ』に連載されている、早大国際教養学院教授の池田清彦（生物学）、解剖学者の養老孟司、（ドキュメンタリー）作家の吉岡忍による鼎談「マンズリースコア」が、滅法面白い。

毎月一回は必ず通う「まちだ献血ルーム」で採決の間、その鼎談を読むのが無上の楽しみとは、我ながらいじましい楽しみですが、面白いのだから仕方ありません。

憲法記念日に因んで、五月十六日号での「憲法は法か」と題する鼎談も、実に面白かった。

衆参両院の憲法調査会の動きをみる

表明できるようにするため。たつたそれだけのことです。そのために勉強するのは「外国では、自己主張しない人間は単に不勉強で無能だと思われるだけです」

ぼくもまさしく、「自分の頭で考え」ることができるようになるため、ただそれだけのために、大学に通って勉強を続けているのです。

と、社共両党を除いた多くの国会議員は、憲法を変えたくてたまらないらしい。ところが、その動きは、「国民に山のような責務や義務を課そうと」するものなのです。

それに対して池田は「そんなの憲法じゃないよ。憲法は、為政者がこれこれのことはしなきゃいけない、と縛るためにある。国民はこうしろとか、これはするなっていうのは、法律で決めればいい問題だ。」と、立憲主義思想に基づくごくまっとうな意見を述べており、これは憲法上、自明の論理です。

ところが政治家は先述のように、憲法

は国民の行為を規範するものであると捉えてしまうから、「政治家の知性が劣化してきているんじゃないか」と疑われてしまうのです。

ぼくは事あるごとについているように、憲法を変える必要はない、と思います。

そんなことを審議している時間があつたら、国会議員の方々には、国民を幸福にする施策を実施するための審議をしていただきたいのです。たとえば、この会報第十七号でも取り上げましたが、「医学立国日本」を目指し、日本国民は常に誰もが等しく、世界最高レベルの医療を受けられる施策を実施する法律を制定していただきたいのです。

そのためにはたとえば、その能力はあっても家計が許さないために、医学部への進学を断念している方への奨学金制度を充実させるのも、ひとつの方法です。優秀な医師を世界中から来日させ、その医療スキルを日本の医学教育に活かすのも有効な方法でしょう。

あるいは、毎年三万人以上の方々自殺している現状を少しでも、改善しなければなりません。

交通事故死は八千人台で推移している

